

残像

詩歌がことばのイメージを大切にするのは当然のように考えられるけれども、イメージが自覚されるようになったのは、それほど古いことではない。欧米でイメージを詩のいちと考える詩人イマジストがあらわれたのは、二十世紀になってからである。それを考えると、俳句がはじめからイメージを重視する点で、世界に先がけていたことは了承されるであろう。

ことはすべてイメージをもっている。

名詞の方が動詞よりもつよいイメージをもっており、形容詞の方が副詞よりもイメージが明確である。イメージの詩、俳句が、名詞中心になるのは自然である。このころのように動詞の多い俳句はイメージの貧しさに苦しまなくてはならない。

ことばのイメージは、ことばが消えたあとも一瞬、それが続いているように知覚される。ものを見ていて、それが消えたあともなお、イメージが残曳する。残像である。

この残像作用をうまく使ったのが映画である。映画のフィルムの一コマ一コマは切れて静止しているが、映写すると、切れ目が残像でふさがれて、連続したもののように感じられる。

ことばもこの映画の残像に似たはたらきをもっている。ひとつひとつは、独立し他との間に切れ目、空白があるけれども、続けて読むと、切れ目の空白は残像によってふさがれて意識しなくなる。ことばを読んだあと記憶に刻まれるのは、つながったことばである。

私はかつて、このことばのことを修辭的残像と命名し、そのはたらきを考えたことがある

(「残辭的残像」みすず書房)

さきにものべたことだが、イメージは名詞がもつともつよい。残像も名詞がもつとも大きい。イメージの詩、俳句は名詞中心になるのは自然であろう。

目には青葉山時鳥初鰾

素堂

こういう句では、動詞の出る余地はない。それでいて全体はしっかりまとまりがついている。残像によって、三つの句が結れているのだが、余韻は豊かである。その分、論理的重圧から自由であり得ているように思われる。

名詞イメージの詩という点で、俳句は漢詩の影響をつよく受けている。漢詩は日本人から見れば、すべて名詞文字の行列のように見える。そしてそれが不都合どころか、独自の美しさと感じられ

るのである。

名詞の中でも、もつとも強いイメージ、もつとも響きの大きなのが季語として使用が求められている。季語はたんなる季節語ではなく、長い間の文化の中で熟成し、それだけに連想も豊かで、情緒性も高い。季語の残像によって一句の印象が結合、統合され、情緒をあらわすことができる。季語と並んで俳句作法の一部になっている切れ字も、実は、残像を生かすための工夫であるとしてよいのである。

残像は、ほとんど意識されることなく、つぎのことばにかぶさって、間の空白部をふさぐが、その作用は、つぎのことばの出現によって存分に発揮されないのが通常である。

そこで、句中、重要なことばのあとへ、切字を置くのである。切れたところは、当然、空白である。ことばがあれば、感じにくくなる修辭的残像が、この空白部で半ば顕在化する。残像が十分に生かされて、ある種の情緒になる。

古池や蛙飛び込む水の音

芭蕉

古池や／蛙飛び込む／水の音、の三つの部分、それぞれのあとに、空白があり、そこ前句の残像、余韻がしつかり顔をのぞかせる。切れ字がもつとも大きな余韻をただよわせるのは当然ながら、中七、終五のあとにも残像浮上の空間があることを見落してはならない。

切れ字に劣らぬ大きな余韻をもっているのが、末行である。これがきわめて重要であることは、ために、句を一行づつに分ち書きしないで、つぎつき追い込んで書いてみると、句の味わいはつきり違うことがわかる。

行末の余白は、きわめて大きな抒情的効果ももつもので、俳句に限らないし、日本の詩歌に限らない。定型をすててしまった近代の欧米の詩でも、各行末を余白にして残すという形式はしっかり維持されている。それをなくして追込んで表記すれば、散文とちがわない詩はいくらでもある。

『オックスフォード現代詩選』の巻頭は、ウォルター・ペーターの「モナ・リザ」であるが、これはもともと散文として書かれたものであった。『詩選』の編者が、これを適宜行分けし、行末の余白をつけたところ、詩になったというのである。

それくらい余白、空白は大切であるが、それは残像が浮上するからである。もつとも短い詩が、大きな表現力をもつには、空白がきわめて大切であって、一般の詩の比ではない。その余白は、残像を生かすためのものであることを、はたして俳人たちは充分自覚していたかどうか、かなり疑わしい。

近年、海外でも俳句をつくる人たちが多くなってきた。もちろん外国語であるから、やかましく云えば俳句ではない。俳句もどき、俳句風である。その外国語の俳句のにおいて目ざましいこ

とがひとつある。

俳句を三行に分ち書きすることである。当然、各行末に余白が出る。そこで、前句の残像、余韻が誘発されて、詩趣を深める。

季語、切れ字という作法を用いることの出来ない外国語詩において、三行分ち書きは、それらに代わる有力な技法として注目すべきだろう。わが国でも色紙に書くには分ち書きをしているが、一般の印刷においては、スペース節約のためもあるが、一行詩となっているが、三行詩としての俳句は考えてよい、試みてよいものであるように思われる。短歌も同じである。一行詩としてきた近代風は、つまり、活字印刷の都合に合わせたまでのことである。

第四人称

日記を書くのはもちろん自分で、ひとに見せる気持ちがないのが普通だから、自分のために書いている。

そのため文体も独特である。

自分のことを何と書くか、意外に、やっかいてある。古くは、余が多かったが、いまでは自分だろうか。

そういう自称をなるべく使わないようにするのが日記スタイルである。主語を出さない日本語は日記文体に適しているというべきか、それとも日本語は日記の文章の延長であるというべきか。それはさておき、日本語は日記をつけるのに適した、日記のつけやすいことばである。

英語などは、命令形以外、すべてセンテンスには主語が必要となついているのに、日記は例外で、主語なしにセンテンスを書くことができる。自分をあらわす主語があれば、それは日記らし